

1 た・づ・な

「新たな生産地関連研究の潮流」

日本中央競馬会
競走馬総合研究所所長

藤井 良和



新年おめでとうございます。今年こそは景気が回復して、競馬ファンの皆さんの懐が潤い、競馬の売上げが下げ止まりとなりますよう、心から祈念いたすところです。

昨年、競走馬総合研究所（総研）は創立 50 年の節目を迎えました。この半世紀、競走馬については、調教方法や調教施設、飼養管理方法などに大きな変革があり、世界に通用するほどの驚くべき競走能力の向上がみられました。生産地においても、数々の種牡馬や繁殖牝馬の輸入はもとより、初期馴致や育成方法などが大きく様変わりし、強い馬づくりに多大な貢献をもたらしています。これらの変革には、海外からの新しい技術や手法の導入もありますが、育成技術の向上に関するプロジェクト研究や生産地疾病等の調査研究を通じ、総研も少なからず寄与しているところです。

総研の生産地に関連する研究は昭和 40 年代後半から始まり、育成用・離乳用の完全配合飼料が実用化されています。その後もプロジェクト研究等により、昼夜放牧、発育期の至適放牧条件、騎乗初期の至適運動量、スピード調教開始時期、牧草のミネラル分析、採草地の土壌分析と改良、初期馴致による馬の行動への影響等、さらに感染症関係として、伝染性子宮炎の診断法の確立と蔓延防止、子馬に急性下痢症を起こす馬口タウウイルスの分離・同定等、様々な研究成果をあげて生産地に提言・普及してきています。

私も臨床研究室に所属していた 50 年代後半に、幼駒の前膝が腫れる骨端炎が多く見られるようになり、その原因究明チームに参画しました。たくさんの牧場を巡回して X 線撮影と聞き取り調査を実施し、その原因がカルシウム飼料の多給であることが分かりました。さらに、牧場回りの結果として、化骨が遅く骨端線の閉鎖不全の馬がかなりいることがわかり、骨年齢のわかる化骨標準像をとりまとめ、当時はあまり普及されていなかった X 線診断の必要性を説きました。これは、現在のレポジトリーの X 線画像にも繋がっているものと考えられます。

平成 10 年 9 月には、より密接に生産の現場と関わり、科学的根拠に基づいた繁殖、生産、育成調教の研究が実施できるように、かつ研究成果が直ちに還元でき検証もできるようにと、日高育成牧場に生産育成研究室が創設されました。そのため、総研から 6 名もの研究者を異動させています。主な成果としては、育成馬の調教進度の指標となる V200 の応用、飼料に関する研究の集大成としての『軽種馬飼養標準』の作成、繁殖障害におけるインヒビンの関与、トレッドミルを用いた調教法、ライトコントロールの効果等が挙げられ、それらは以前より増して確実に還元されています。また、当時から増加傾向にあったクラブフットの現状・診断・治療を生産者の方々へ啓発するために、生産育成研究室のメンバーが講師として出向き、多くの研修会を各地で開くとともに、その場で獣医師（研究者含む）、装蹄師、生産者の皆さんがクラブフットの減少へ向けての意見を出し合い、一緒に解決していこうという流れが芽吹いてきました。

そうした潮流の中、平成 18 年には日本軽種馬協会が実施する軽種馬経営高度化指導研修事業が始まり、その中に生産育成技術研修事業が立ち上がりました。そのワーキンググループの青木修氏（日本装蹄師会・事務局長）の尽力もあり、前述の三者に、この研修事業で養成した栄養管理技術者を加えた実務者による研修会が開催されるようになってきました。しかも、上からの押し付けではなく、皆で知識の共有・向上を目指し、共に問題を解決しようとする研修会であり、自由に発言できる意見交換会的要素を加えた研修会へと理想形に近づいてきています。先行した栄養管理や護蹄管理に続き、DOD（発育期整形外科的疾患）関係や診療技術の向上を図る研修会も開かれています。

従来は総研主導で動いていた生産地関連研究の進め方が、生産地の方々自らが総研の協力を得ながら連携して解決していく方向へ大きく転換してきており、今後の成果に期待しているところです。また、今年から南保研究役（生産育成研究室）が推進役となって海外招聘研究が始まります。馬の生殖内分泌学および臨床繁殖学の権威である UC（カリフォルニア大学）デービス校の Ball 教授や Liu 教授と共同で、妊娠維持機構の解明を目指します。このことから、近い将来、早期胚死滅や流産の問題が解消されることを併せて期待しています。